



公来抄
上中下跋書



此本者去来抄ト表屋行ノ公科ノ十哲
除ノ中ノ子原ノ中ノイノ守ノカノイノ句ノ論ヲ言テ
秘傳ノ附方述ニ添クヤラワニ先書ニテ
初心ノタヨリトモ成書也 井士朗作
安永四年乙未三月

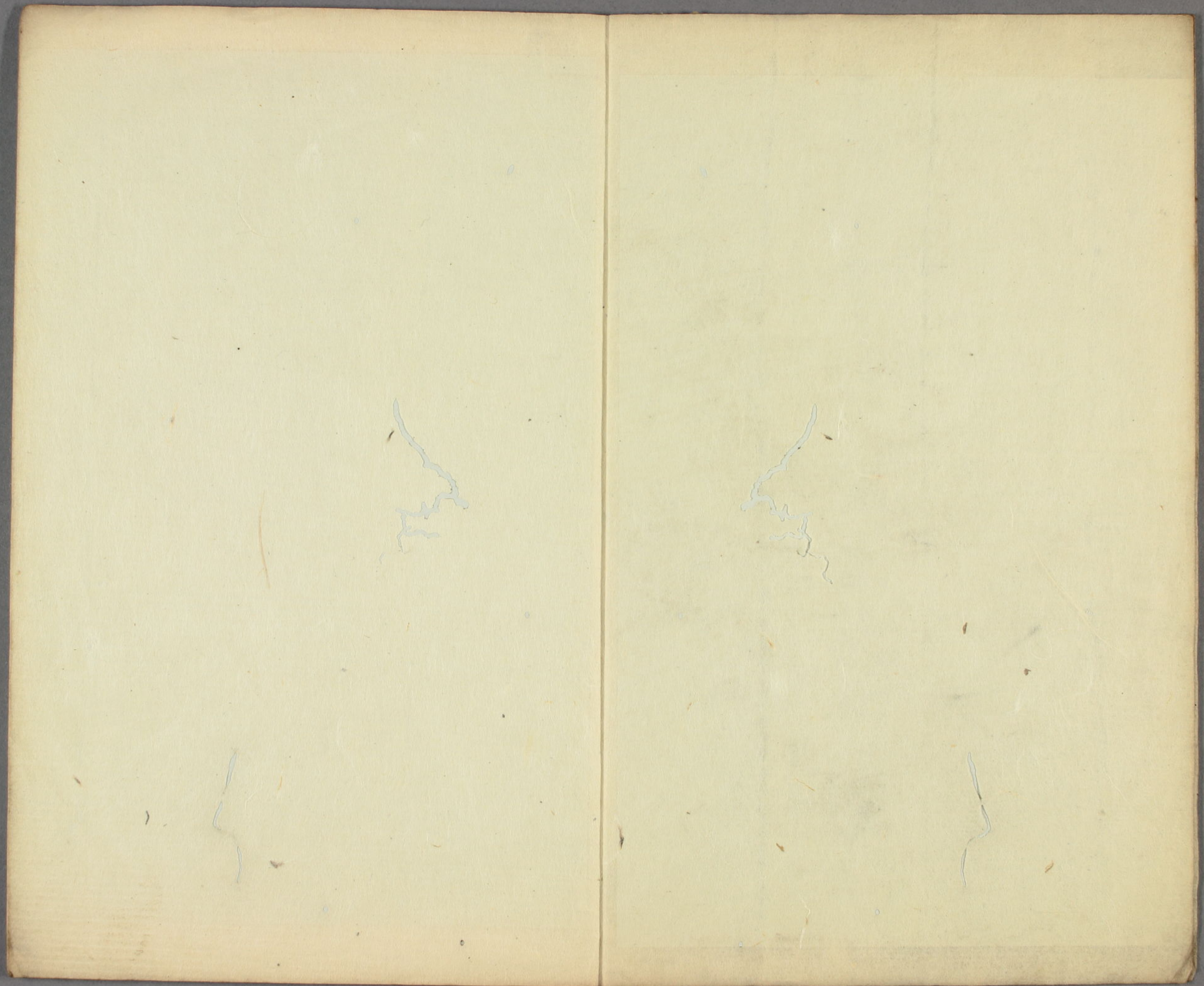
白王都書林

井筒元庄
橋屋治三

表屋

去来抄

上中下
三冊也



思ひまうり時 猫の恋

越人



先所伊賀より... 一を以てに不... 不情をさあ... 人のもして... 世を顯すと...

げやうや 濱のさ... 月

其角

春風う... 雛の... 流

萩子

伊賀より... 他あり...

弓張の角... 月の中

去三好

去三好... 中...

乃のゆ... 口言... 去三好...

いふある帰いふある人と其の... 宗唐曰先師十七の所... 先師曰所... 高の好... 宗唐曰先師十七の所... 高の好... 宗唐曰先師十七の所... 高の好...

去来曰風八千变化... 造する正く厚く... 速する如... 鈍く濁... 重く薄く... かくのめ... あり

へばよ... 去来曰所... 其の用曰一卷に... 随分好... 去来曰所...

れとてあつと見え各一卷三句二句なりんハ又凡流を以し
浪化白今の他信おほむるを同ゆらむといひてをまほ日因し
くハ一巻に三句ありまほ 猿公義の申は侍人いりし小市門
の渡し門中の公羽サレ此集撰む時めくくホの句はく
多しとして稼務ふの句を他へて入法へり 左半日吟吟る
時ハ凡るう凡ハ心亦久自然のる也 先原早をよ見え
二凡にちくとくまをまししを示し 法ありたまは原
の凡にちつんて亦化をあつさうハ都は原のそらたへり
杜半日多句のそ思ひにまま半日多句ハかえとて
感らるるつらしとてあつとてハたつ次やとて入るやと
いふハちつんてとてつらしといふなり也
杜半日多句と折句の後ハつにまま半日七情万景こころに

常とてあつと見え各一卷三句二句なりんハ又凡流を以し
浪化白今の他信おほむるを同ゆらむといひてをまほ日因し
くハ一巻に三句ありまほ 猿公義の申は侍人いりし小市門
の渡し門中の公羽サレ此集撰む時めくくホの句はく
多しとして稼務ふの句を他へて入法へり 左半日吟吟る
時ハ凡るう凡ハ心亦久自然のる也 先原早をよ見え
二凡にちくとくまをまししを示し 法ありたまは原
の凡にちつんて亦化をあつさうハ都は原のそらたへり
杜半日多句のそ思ひにまま半日多句ハかえとて
感らるるつらしとてあつとてハたつ次やとて入るやと
いふハちつんてとてつらしといふなり也
杜半日多句と折句の後ハつにまま半日七情万景こころに

えのや土つらあまの白し せし
二月にう啞ののち申すい月をりなま
は句をよ情あつらうと連奇原花のえといふこと
伴やとての感悟をもと連奇しとてのちつらとて

去来
去来

好者

れとてうらと見え各一巻三句二句うら人ハ又凡流も同じ
浪化白今の他信おぼゆると用ゆるもいあくをま日国し
くハ一巻に二句あくるま所 猿蓑の中は詩人いりし小津門

Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side.

幾の心処や邪の光 うち 去来

大宰府奉納の句あり許さ日おる句よ切字二用ハ
法とい句切字の二の痛も去来日予着て切字二
うらにころりやいふうらもこれと切字用ハ
慢 人ともありヤ
具 用

許さ日此句謎々句也去来の日是ハあそよせ
後燈も人ともありせしやうにみえらうと見えん
あそ人ともありせしやうとあひとる合点して
いふもめやむい一軍句とあおろそれハ句の切字
或ハはしとものやとてまじく句しむるを
えのや土つらまき白 せ
去来
去来
は句を去来情あそらうと連奇作花のえとむらと
伴やとて感悟とて連奇ししものやうらとて

い申能
考し

うくひこの海向をうく河への道
卯七
考しともしたれはすう野坡目おとあつらぬらうハ
やまうの又まよふらふん去来も是二同しと申す
のといひて風情はわれとなくはむといふん
まじらへしと也

應
は句ハ十折目ノ各句ノ内也夫ニ絶ないらくと申せし
去来

夫考曰此句不易うと承行のた中をたきし
先師のやうにうらを悟るの曲翠平曰句の管を
門也許古曰を佳句也いふ十分ありて其句曰雪の
妙也去来曰人々の評亦たのこしは川曰又去
先師近化りわの句なりと此同門の句と絶しと
たもいふ今ハ自然にも此場とくまじらへ
去来曰此句を佳句と申す昔も
風流道くの侍と能く考知まへし是をたつた
新古にのりく分れもの也

月中病をさし
宗澄
真室
芭蕉

是等の歌や
魚目曰日月と園も
吟詠の自然を
魚目曰流川の句いかに去来曰流川の句をたのれう
一つのおおきあつてと也形容るは
むとやしにまじらへしこの思ふさうな
は待ふく流りす

あ侍の侍をこそとてまことの侍

下

海を肥えりて老に獲るるもちたすまじ 常矩

或はよと述あるひに歌書の詞つみ又六誼とらふと
おねあふとくさるるを言てしゆは流りし流と今に
よと人あり 曾所曰むとやりにたにこくさといふを
流とあひせ 曾所曰流は秋の一事とておねあふと
あふらんといふと流とはかたうある

曾所曰不易流り言えたりといふに古来曰け事
辨ししとくさるる人休たたとていとく不易は其為の
時流りて坐卧行住屈伸伏仰の形同しうささかことし
一時的の言風是して于安の時不替るといふと其言も
考しりしとは同し人也曾所曰風を愛するは其人を
といひに 古来曰本とくさるるは或は流れしといふ
言るれと曾所流りともいふ或は離れしといふ

古来曰御行を御行せんと思ひあうといふ 時侍
の御字あふくの侍と能く考知まへ一是ととる
時侍古来のつらうと分るあふ
古来曰御行の御行者おの好るは此を古来の句を
一寸らに導きとてあひし句くは不審とおし難と
辨ふるあふに若解くといふ句あふといふこと故あふを
工夫一切者に尋ねしへ一我ら御行れ上達を
あふといふ人の句と申るもの也始とて一句くをとかめら
ある御名の吟味のくちには月日あふといふ御名の成
しるるとは御名師曰今の御行は日以こまをつけ
席にのそきては氣録を吐きし人頭と云ふ
へかすといふ 支考曰むの御行は如來禪の
ことし今の御行は祖師禪のことし 捺着すれハ
昂轉す

捺着

此の書は... 解を... 弱く... 速なる... 鈍く... 濁...
 此の書は... 解を... 弱く... 速なる... 鈍く... 濁...
 此の書は... 解を... 弱く... 速なる... 鈍く... 濁...

ついでにや極の位... のひき... 暮

好者

此の... 蛙... 好者... 野明... 舞... 老人... 静...

花... や... 白... 白... 白...

野明の... 白... 白... 白...

野明の... 白... 白... 白... 野明...

